

景観フォーラム

巻頭言

寒い夏が到来しております。ある地域ではひょうが降ったとのニュースが舞い込んでおります。夏生まれにとって夏は常に暑いものだという常識が覆されるような寒さが続いております。涼しくて過ごしやすいのではありませんが、このまま秋が来てしまうのではないかと少し心配しております。

さて、参議院選挙が近づいております。報道では6年半続いた安倍政権をいかに評価するかと言っておりますが、恐らく経済活動に対してはそこそこ良い評価を下す方々が多いかもしれません。低金利政策と低額法人税によってとりわけ大企業は素晴らしい業績を上げているようです。しかし、地方の金融機関では低金利政策が長く続いたしわ寄せとして、業績を悪化させ人員削減へと向かわせており、また、中小企業の業績を押し上げるところまではいっていません。「富める者が富めば、貧しい者にも自然に富が滴り落ちる」とする経済理論トリクルダウン理論という呪文を言っておりますが、庶民にはその恩恵が全く感じられない6年半というのが正直のところですよ。

その安倍政権について本質的な問題を上げるとすれば、安倍晋三という国会議員が基本的人権というものを全く理解していない人間であるという点でしょう。道義心をもって政治を執行するということになされてはならず、もろもろの政治的経済的問題の処理の仕方に正義が働いていないということです。即ち、政治家としての根本的スタンスがないということです。彼が某商事会社の営業部長であるとするならば、外国に原発を売りに行くことも許されるでしょうが、一国の首相を務める人材としてはあまりにもその言動の能力のレベルが低すぎ、その政治家たる人物という点において疑いざるを得ません。正義なき「まちづくり」がなり立たないように、正義なき「くにづくり」も成り立ち得ません。

ではなぜそのような現象が日本の政治に生じているのでしょうか。答えは簡単なことです。現代日本の政界が“世襲制”になってしまったからです。これからの日本の選挙でこの政界の世襲制を廃絶することなくして現代日本の政治は良くはならないでしょう。

NPO法人日本景観フォーラム理事長 齊藤全彦

<日本景観フォーラム2019年度（平成31年度）年間スケジュール>

*2019年度とは2019年4月1日⇒2020年3月31日のことです。

2019年

- 4月25日（木）第1回理事会・総会 於JICA研究所
- 5月21日（火）**第1回景観研究会（東京の景観）** 於JICA研究所
- 6月30日（土）**第1回景観まちあるき（東京都内：谷中）**
- 7月23日（火）**第2回景観研究会（東京の景観まちづくり）** 於JICA研究所
- 8月 夏休み（景観研究自由参加）or 一泊二日で遠方の町並み見学会など？
- 9月24日（火）**第3回景観研究会**：（深川）
- 10月6日（日）**第2回景観まちあるき**（深川）
- 11月19日（火）第2回理事会 於JICA研究所
- 12月17日（火）忘年会（素敵な飲み屋街）

2020年

- 1月25日（土）**第3回景観まちあるき**：神社景観（香取神宮）
- 2月18日（火）**第4回景観研究会**：お台場の景観 於JICA研究所
- 3月28日（土）**第4回景観まちあるき**（お台場）

★以上の年間スケジュールは第一回理事会の承認の上実施されます。

谷中まちある記

会員 野田路人

6月30日の日曜日に、令和元年最初の「まちあるき」で谷中のまちを散策しました。梅雨の為当初予定した6月15日は、本降りの一日となり延期、当日も前夜からの雨が朝方まで残り、またまた延期かと直前まで気を揉みましたが、何とか雨もやみ曇天の下、斎藤会長他3名がJR日暮里駅(北改札口)に集合し、予定のコースへスタートしました。

殆ど「谷中」に関する予備知識が無く、まずは事前に「谷中」についてネットで下調べを行い、周囲のコースを検討しました。

ネットによると・・・「谷中は「寺町」と呼ばれ、仏教の寺院が集中している古い下町で、地名の由来は本郷台と上野台の谷間に位置することから、名付けられたといわれています。

地形的には上野の山から北西へ続く細長い高台（上野公園～谷中霊園～道灌山）を最高点とし、西へ向かって傾斜を下り、旧藍染川の軌跡（よみせ通り～へび道）までのきわめて起伏の豊かなエリアを指します。山頂の尾根筋、傾斜の中腹、そして谷筋には、それぞれ等高線をつないだような3つの街路が存在しており、現在までエリアを縦断する主要街路となっています。



江戸時代上野に寛永寺が建てられるとその子院が次々と建てられました。幕府の政策により慶安年間（1648年 - 1651年）に神田付近から多くの寺院が移転し、明暦の大火（1657年）の後に焼失した寺院が移転してきました。寺の増加に伴い参詣客も増えると徐々に町屋も形成され、江戸の庶民の行楽地として発展しました。1868年の政府軍と彰義隊による上野戦争で多くの寺院が罹災したものの、関東大震災や第二次世界大戦では被害が少なく、旧来の古い町並みがあり仏教関係の建造物が多数残されています。1887年に寛永寺の収容地に東京美術学校が開校、また谷中の西側の加賀上藩屋敷跡に東京大学も開学し、両地から近い新興住宅街でもあった谷中一帯は文化人が住む街ともなりました。」と、あります。

「谷中」、「根津」、「千駄木」、通称「谷根千」と呼ばれるこの地区はアクセスルートも複数あり、色々な古い建物、寺院、町並みが残っており、見所が沢山あります。見学コースも色々考えられますので観る対象を絞らないと、とても1日では周り切れません。「谷中」の町並み景観を実際に観るとのスタンスで、階段を下り、細い坂道を上るなど町の中を一筆書きで歩く見学コースを作成しました。



今回実際周ったコースは・・・JR日暮里駅(北改札口)を10:30にスタート⇒「下御隠殿橋(トレインミュージアム)」で行き交う電車を見学⇒「御殿坂」⇒「本行寺」で山門内を見学⇒「経王寺」で山門に残る上野戦争の銃弾跡などを見学⇒「初音小路」で昭和の雰囲気とそのまの飲み屋横丁を見学⇒「朝倉彫塑館」は入館し、朝倉文夫の作品と旧住居とアトリエを見学(入場料:500円)⇒「タヤけだんだん」の階段を下り⇒「谷中銀座商店街」で見学と昼食⇒「よみせ通り」を往復して町並みを見学⇒「岡倉天心記念公園」を13:30頃見学⇒「蛭坂」を上り⇒「観音寺築地塀」を見学⇒「初音の道」を散策(「スペース小倉屋」を入館見学(入場料:無料)、「スカイ・ザ・バスハウス・愛玉子」の外観を見学、「上野桜木あたり」の昭和の木造を改装した各ショップを見学⇒「下町風俗資料館」を入館見学(入場料:無料)⇒「カヤバ珈琲」を外観から見学⇒「ヒマラヤ杉/みかどパン」を見学し、ヒマラヤ杉が台東区の景観重要樹木の指定のプレートを確認⇒「大名時計館」を外観から見学(15:15) 雨が強く降り出した為、ここで今回のまちあるきは終える事とし、地下鉄の根津駅方面を目指し「あかぢ坂」を下りました。

「根津神社」は又次の機会いとしましたが、ほぼ予定の施設・町並みの見学を終え、当初から予定していた親睦会は雨の中、その時間に営業してる店を根津駅と千駄木駅の間で探し、雨宿りを兼ねた意見交換会となりました。

お互い「谷中」で印象に残った施設・町並みについて、意見を出し合うと・・・山の手線の内側としては珍しく駅前に高い建物が少なく、想像以上にお寺の多いまちで、邸宅と言うよりはこじんまりとした家が多いと感じた。駅と谷中の墓地が隣接している為、他の駅とは大きく異なり駅前開発がほとんどできず、「初音小路」のような飲み屋街がそのまんま今に残り、逆に線路の反対側の東口(荒川区側)は他駅と似た駅前開発が進められているのではと推察しました。

外観だけを見る予定だった「朝倉彫塑館」は朝倉文夫の多くの作品を間近に見る事が出来、特に朝倉文夫が自ら設計したという中庭を取り巻く自邸は、空間演出と使われている材料に圧倒されなど一見の価値があり、単独に又訪れたい思える美術館でした。



会話の中で「谷中のまちを色で例えると・・・に対し、「濃い藍色」「茶色」「黒」などで、明るい色は出ず、「まちを言葉で言うなら」では「ほんのり」「死んでる(活気が全く無いまち)」「昭和」などの印象でした。

これはこの町に多くの寺や、民家、商家が残り、それを中心に見学したこと、観光客相手のお店は営業していますが、この町に生活する人が利用する生活の為の店舗は日曜でほとんどシャッターを下ろし、営業していなかったからかもしれません。

自分の受けた印象を適切に「言葉」や「色」で表現しようとするとなかなか難しく、聞く側も自分の感覚に置き換えると又違って理解されるような気がします。

まちの「らしさ」は視界に入る人造物の家並み道路の幅、建てられてからの年数による建造物の雰囲気、自然物の土地の高低差や樹木、感覚的なその町の生活感や時代感、解放感や閉塞感など多くの構成要素により醸し出すものを興味も異なり個人差がある中、どのような視点で観るかでかなり違ってくると感じた「まちあるき」でした。

<LFJブックレビュー 63>

『川の文化』 北見俊夫著

講談社学術文庫

1981年原著刊

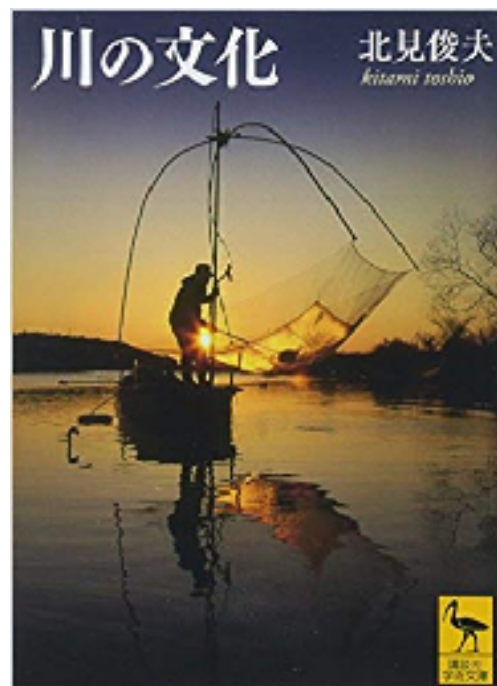
文明の発展段階を考慮したとしても、人類の交通体系は大よそ「川」から「鉄道・道路」へ移行したのがこの20世紀といえるのではないだろうか。交通手段の主役は船から鉄道・自動車へと移行したのであるが、川に対しての人類の付き合いは鉄道・自動車の比ではなく、人類文化の根幹を作り出してきた「文化の母なる川」であるという。

水は生命の根源である。月における水の存否という問いかけは生命がかの地で生きられるかどうかへの問いかけである。「カワはもともと水の供給源の総称であった」ことは頷けることであり、「湧き水、泉こそ、カワということばの本家本元」ということになる。即ち、人間生活にとって、川は最も身近な且つ必須のものであり、人間の自然との対立または融合の最適地であったということになる。そして日本という狭い土地柄には多数の山々から流れてくる無数の川が散見される。民俗学者の柳田国男は日本の天然の最も日本的なものは川であると言い切ったという。「風景観賞の手ほどき」というようなものかもし入用ならば、日本では何としても川からまづ学んで行かなければならなかったのである」という。”川の国“は「川を媒介とした思考」があり「歳神や祖霊が川を通路として往来すると考えた」のであり、方や「不浄を川に流し去るような習俗」もあるという。すべからく、日本人の生活は川との多様なかわりを持ってきたのではないだろうか。

著者は先ず「川と交通」として北上川と利根川の舟運を取り上げる。「北上川は内陸部と沿岸部を結ぶまさに大動脈のようなものであった」と指摘し、薪炭と塩という生活必需品の運搬の主役としての舟運路であったという。片や、利根川存在は関東平野の中で明治維新頃まで経済と文化を創造する中心的な役割を持つものであったが、著者は利根川の周辺を概観し、河岸の状況・歴史、中継積換河岸などを詳述することによって、実質的には、第二次世界大戦終結時まで河川舟運が日常生活の隅々まで活用されてきたことを明らかにしている。そして利根川と信濃川との連携活用によっていかに裏日本との経済的・文化的つながりが緊密になされ、それは日常生活の中で宗教・文化に深く息づいていたという。

この書の中で最も多くを割いているのは「川の民俗文化」である。「川の幸」として鵜飼などを取り上げ、「渡しと橋」では川の渡し方と橋のありようを説く。「川と年中行事」では川がいかに年中行事の主役であるかを祭りを通してみる。「人の一生と川」では誕生から葬送の儀礼まで川との関りを論じ、人間生活の中で川を媒介とする神々の世界の干渉として「神々の通路として川」を説明する。「川と民俗芸能」そして文化伝播にみる川の遮断性と流通性として「川と民俗文化の系統」を探求する。

著者は恐らく川離れしてしまった現代人に、環境問題の根源は如何に川との密接な関係を捨ててしまったかにあるのではないかと指摘しているのではないかとと思われる。（斉藤全彦）



<LFJブックレビュー 64>

『橋を透してみた風景』 紅林章央著 都政新報社 2016年刊

人類がその長い歴史の中で創造してきたいろいろな構造物の中で生活に直結し且つその便益があまり気づかれないものとして、最初に思いつくものは“橋（はし）”というものではないだろうか。「橋とは端（はし）をその語源とする。地域の境界、端を表す言葉であった。そこは、異界との出会いの場であり、また、別れの場でもあった。その一橋一橋に物語がある。」と著者が指摘するとき、その念頭には、隅田川に架かる35もの橋が目浮かぶ。それらは皆立派な歴史を持つ橋々である。

さて、江戸時代から俯瞰すると、関東平野の江戸幕府の北の入り口として、先ず「千住大橋」（1594年）が築かれ、次に南の入り口として「六郷大橋」（1600年）が架けられ、隅田川の二番目の橋として「両国橋」（1661年）を上げたい。「両国橋という名は隅田川が武蔵国と下総国の国境になっており、橋は二つの国（両国）に架かることにちなんで付けられたものであった。両国橋は幕府が隅田川で最も重視した橋で、江戸時代を通じ直轄で管理した唯一の橋であった」という。江戸時代において橋の建造は現代以上に「インフラ整備と経済発展は相関関係があった」という指摘には納得できるものがある。

ところで、日本の近代化は橋という構造物から進められてきたのではないかと思う節がある。それまで日本の橋造りの中心は木造であり、明治時代に入ると「新政府は、文明開化のイメージ戦略として石造アーチ橋を用いた」ということで、「堅牢で維持管理費がかからない」という点からも日本中を席卷することになる。維新以前の石橋建造は中国から伝来し九州で技術を進化させた和式の石橋があったが、明治以降は西洋式の石橋建造に転換していったということになる。

しかし、これらの近代化を推し進めてきた背景には重要な人物たちがいたということを忘れてはならない。まず、原口要（1851－1927）がその筆頭といえるだろう。米国の工科大学を主席で卒業し、ニューヨーク市のブルックリン橋の建設工事に従事し、帰国すると、鉄の時代を象徴するかのように、浅草橋、吾妻橋、柳橋、鰐橋の設計・建造にかかわり、第二世代として御茶ノ水橋は原龍太（1854－1912）がその采配を振るった。そして、関東大震災（1923）の復興事業として橋梁建設が急ピッチで進められることとなり、合わせてその橋梁技術は一举に世界水準に追いつく。その牽引者として、太田圓三（1881－1926）と田中豊（1888－1964）の二人が重要である。彼らは耐久性を軸に「景観との調和、通船量など架橋時点の条件を考慮し、橋の構造を割り当てていった」という。橋梁美の概念を一変させた橋として永代橋、清洲橋は記憶に新しい。そして太平洋戦争による日本の都市の壊滅的破壊から、この橋梁建設は不死鳥の如く甦る。尚、「2015年に“明治日本の産業革命遺産”が世界遺産として認められた」という。私たちは橋という遺産から明治という時代をもう一度見直してもいいのかもしれない。（斉藤全彦）



天地玄黄 NO.20 「埼玉県の景観重要建造物②」

前回の天地玄黄より引き続き、埼玉県の景観重要建造物の後半を紹介します。景観重要建造物は、地域の個性ある景観づくりの核として景観上重要な建造物を維持、保全、継承するために指定するものです。景観重要建造物の探訪を機に埼玉県の魅力にも触れていただければと思います。

埼玉県では今までに次の7件を指定しています。

- 第1号 ふじみ野市立福岡河岸記念館（ふじみ野市）
- 第2号 藤橋藤三郎商店のレンガ造煙突（深谷市）
- 第3号 旧平沼寛一郎邸（飯能市）
- 第4号 鴻巣市産業観光館の蔵（鴻巣市）
- 第5号 吾野宿・石田家（藤田屋）（飯能市）
- 第6号 吾野宿・大河原家（問屋）（飯能市）
- 第7号 吾野宿・高山家（うろこ屋）（飯能市）

※飯能市が景観行政団体になったため、第3号、第5号、第6号、第7号は現在飯能市の指定となっています。

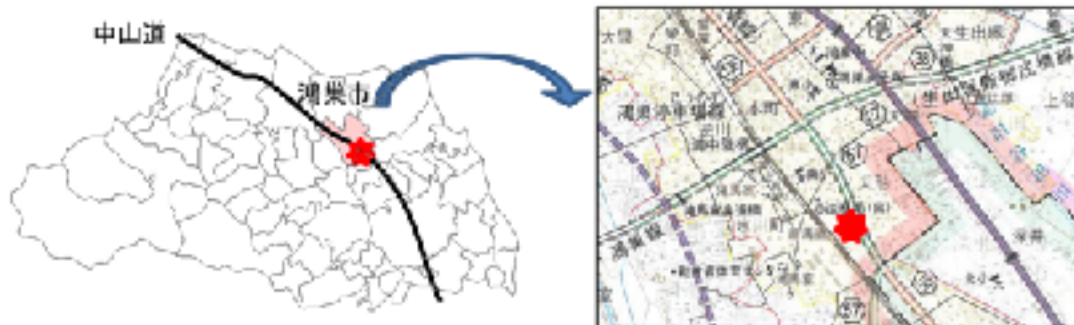
■ 鴻巣市産業観光館の蔵（鴻巣市）

指定番号：埼玉県指定第4号

指定年月日：平成25年10月8日

建造物の所在地：埼玉県鴻巣市人形一丁目4番20号

鴻巣市産業観光館の蔵は、明治後期に段階的に増築された人形店の蔵を鴻巣市が改装したものです。木製の建具と白壁が生活感のある柔らかさと重厚さを感じさせるとともに、中山道の宿場として、また雛人形づくりの拠点として発展してきたという、地域の歴史と文化を伝える景観の一部として親しまれ、ランドマークとなっています。



■ 吾野宿・石田家（藤田屋）

指定番号：埼玉県指定第5号

指定年月日：平成27年3月27日

建造物の所在地：埼玉県飯能市大字坂石町分216番地

石田家は、大正初期に建てられた、洋風の要素と純和風の要素を併せ持つ擬洋風建築と呼ばれる建造物です。古民家が続く吾野宿のまち並みにあって、ハイカラな外観がアクセントとなり独特の雰囲気をつくり出しています。



吾野宿・石田家〔藤田屋〕

■ 吾野宿・大河原家（問屋）

指定番号：埼玉県指定第6号

指定年月日：平成27年3月27日

建造物の所在地：埼玉県飯能市大字坂石町分213番地

大河原家は、明治時代に武家屋敷長屋門を移築して建てられており、物見格子やけやき一枚板の門扉、雲形のひさし持ち送りなどが特徴の長屋門造りの建造物です。吾野宿のまち並みの中心的存在となっています。



■ 吾野宿・高山家（うろこ屋）

指定番号：埼玉県指定第7号

指定年月日：平成27年3月27日

建造物の所在地：埼玉県飯能市大字坂石町分220番地

高山家は、江戸時代中期に建てられた、2階軒高の低い「厨子(つし)造り」と呼ばれる民家です。吾野宿のまち並みの中でも最も古いといわれており、かつての宿場の面影を伝えています。



吾野宿・高山家[うろこ屋]

〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町14-5-502

TEL : 03(3780)3814

FAX : 03(6379)6681

E-mail : info@keikan-forum.com

URL : <https://www.keikan-forum.org>

